

中原佑介美術批評選集、 刊行スタート―「美術批評の持つ力が、未来を拓く」

美術評論家・中原佑介が没したこの二〇一一年の夏、「中原佑介美術批評選集」の刊行がスタートした。中原が生前に執筆した論文は膨大で、かつテーマも広範囲にわたる。全12巻には、主要作品が収録される予定だ。中原の足跡と選集の概要について紹介したい。



ユーモアほど
威厳にみちたものはない

—— マルセルデュシャン

美術評論家・中原佑介が、今年3月3日に亡くなった。折しも、批評選集の編集が進んでいる最中の出来事だった。打ち合わせでお会した氏は、やおら進まぬ編集に、「僕が生きているうちに出してくれればいから」と冗談交じりに笑っていたが、その言葉がジョークでなくなってしまったことが、いまではとても悔やまれる。このような経緯から、今回刊行

される選集は、生前の中原の意向を汲みつつ、最終的な論文の選択は、中原佑介美術批評選集編集委員会で行うことになった。

ユニークな 批評スタイル

中原のデビュー作「創造のための批評」は、1955年、瀧口修造、花田清輝、岡本太郎など気鋭の論客が寄稿していた「美術批評」誌上に発表された。針生一郎、東野芳明とともに、のちに「御三家」と呼ばれた中原は、京都大学で理論物理学を専攻していたとい

う特異な経歴から、強靱な論理を軸にクールでレトリックに富んだ文体を駆使し、異彩を放っていた。その後、時流に即した論文を発表する一方、明治以降、挫折を繰り返す日本美術の姿を描いた「日本近代美術史」を57年から足かけ2年にわたって連載し、批評の足がかりを築く。

そして特筆すべきは展覧会評だ。「美術手帖」「みづゑ」「三彩」などの美術雑誌に、毎月のように展覧会評を執筆。さらに61年1月から65年前後までは、ほぼ週一回のペースで、読売新聞夕刊美術欄

に原稿を書いている。相も変わらずの団体展は木っ端微塵に駁論され、作家たちも辛口批評に晒されてヒリヒリしていたに違いない。

70年代を境に 変わるスタンス

50年代の抽象表現主義に代わり、60年代の美術界は、「読売アンデパンダン展」が、反芸術の性格を色濃く帯び、なんでもありの状況が63年の打ち切りまで続いた。このアンデパンダン展は強烈な体験であり、自分の批評的営為と切り離せないものだ、のちに中原は記している。



1982年、タデウス・カントール「死の教室」公演時の中原(右)。会場にて、友人のボロフスキー氏と撮影。安青重男 ©ANZAI



1957年にフランスの批評家ミッシェル・タビエが来日したときの座談会。この後、日本に「アンフォルメル旋風」が吹き覚れる。右列奥から中原、東野芳明、左列奥から大岡信、針生一郎、タビエ[みつ]1957年10月号より

を境に、次第に変化していく。美術全体も、「もの派」を中心に、絵画や彫刻などへの伝統回帰の傾向を強め、中原もいちばん関心があった美術の動向は67年までだったと語っている。美術雑誌から距離をとり、一

また、「不在の部屋」展(1963)「Tracks & Vision——盗まれた眼」展(1968、石子順造と共同企画)など、自らの批評的立場から展覧会を企画し、実践的検証を行った。なんといってもその代表格は、70年の東京ビエンナーレ「人間と物質」展だろう。世界の最先端の美術を体現し、その後の動向を予見したとされるこの展覧会は、国内外で伝説化されている。デビュー以降、時代を鋭く斬り続けてきた中原の論調は、70年頃

以上、時勢と併走する中原の姿を追ってみたが、これで半分くらいだろうか。残りの半分は、中原が生涯かけて興味を持ち続けていたテーマだ。
 ダダ、ロシア構成主義、東欧・メキシコ美術、ナンセンス芸術、大発明物語、ブランクーシ、洞窟壁画。愛情を注ぎ、対象に限りなく近づこうとした文章にもまた、中原の批評を読み解く鍵が眠っているのかもしれない。

雑誌や入門書、カタログの執筆、全集の監修や解説、個々の作家論、展覧会企画、翻訳などに従事し、館長や学長などの公職に就いた。晩年は「脱芸術」というキーワードを打ち出し、ラジカルな批評精神は衰えることがなかった。また「東欧の資料が揃ったので、そのことについてまとめたい」とも話していた。

戦後美術批評の命題を背負う

中原佑介美術批評選集 全12巻

編集：中原佑介美術批評選集編集委員会
 (代表：北川フラム／池田修)
 装丁：浅葉克己
 発行：現代企画室＋BankART出版
 全12巻セット予価・31500円
 各巻予価・2500円前後
 年2回配本、2013年夏完結予定
 第1回配本(既刊)
 第1巻、第5巻、各定価2520円
 解題：加治屋健司



1. 創造のための批評—戦後美術批評の地平(既刊)
2. つくられた自然—日本近代美術史とダダ・シュールレアリスム
3. 反芸術の時代／ナンセンスの美学—アンテ・バンダン・ネオダダ・ハブニング
4. 見ることの神話—60年代から70年代へ
5. 「人間と物質」展の経緯—日本初の本格的な国際展(既刊)
6. 終わらぬ始まり—現代彫刻論
7. 日常性に進む美術—写真・映像・デザインの世界
8. 観客の誕生—現代芸術入門
9. 社会と美術の関係—文明と都市のゆくえ
10. 大発明物語—科学と芸術の往来
11. アーティストとの対話—作品／作家論＋補遺
12. ベストセレクション中原佑介(英訳本)

中原が一貫して嫌ったものは、意味のない権威、既存スタイルの踏襲、硬直した思考、個への執着、牧歌的な狡猾さなど。つまり固定化されたものへの厳しいまなざしだった。一方で、すべての批評家は、発した言葉が固定化・概念化・体系化され、そこに自らが飲み込まれるジレンマにつねに脅かされている。氏はその危うさを、科学的な弁証法と、ダダ的ナンセンスで身をかまし、風穴を開け、人間

が物質を見ることで生じる関係性まで立ち戻り、つねに新しい言葉を立ち上げることに徹していたと思える。
 中原は、戦後美術批評の命題を、独特の距離感とユーモアをもって引き受け、初志貫徹した最後の批評家といつていい。この選集発行の意味は、その仕事の全貌を示し、若い人を筆頭に、可能な限り多くの人に読んでもらい、氏の精神を未来につなげることだと思ふ。